

かがわ 「里海」づくり ビジョン

【INDEX】

1. はじめに ～なぜ今、「里海」なのか
2. 目 的 ～ビジョンのねらい
3. 現状と課題 ～香川の海の変遷
4. 目指すべき香川の「里海」づくりの姿
5. 取り組みの方向性／① 香川の「里海」づくりの特徴
／② 取り組みを推進するための6つのポイント



1. はじめに ～なぜ今、「里海」なのか

今、瀬戸内海は転換期を迎えています。

今から 100 年以上前、

シルクロードの命名者であるドイツ人のフェルディナンド・フォン・リヒトホーフェンは、初めて訪れた瀬戸内海を

「大小無数の島嶼…広い区域に亘る優美な景色で、これ以上のものは世界の何処にもないであろう」と賞賛し、「この状態が今後も永続するよう祈りたい。

この最大の敵は、文明とこれまで知らなかった欲望の出現である」と警告を残しました。★

高度経済成長期に入ると、

わたしたちは「物質的な豊かさ」を求め、大量生産、大量消費、大量廃棄を続けた結果、瀬戸内海は水質汚濁が急激に進み、昭和 40 年代には「瀕死の海」と言われるまでになりました。その後、瀬戸内海環境保全特別措置法（瀬戸内法）が制定され、水質総量規制などの施策が講じられ、一定の水質改善はみられましたが、いまだ多くの課題を抱えており、その多くは人の手によって解決しなければならない問題です。

そして今。

「瀬戸内国際芸術祭」をはじめ、観光や文化的視点から瀬戸内海を再評価する動きが起り始めるなど、瀬戸内海を取り巻く状況は新たな局面を迎えています。

次の 100 年に向けて、

わたしたちは、瀬戸内海とどう関わっていけばいいのか。

瀬戸内法制定 40 周年（平成 25 年）、瀬戸内海国立公園指定 80 周年（平成 26 年）の節目を迎え、今一度、人と海との関わりを考え直す時期に来ているのです。



昭和初期の備讃瀬戸



瀬戸内国際芸術祭で賑わう瀬戸内の島々

★ 「Tagebucher aus China」 written by Ferdinand Freiherr von Richthofen

海から持続可能な暮らしや社会を考える。

山



川



里



海



今、「里海」という新しい考え方が注目されています。

「里海」とは、

海域・陸域を一体的に捉え、

人が適切に関わることにより、

多様な生物が生息できる健全な海の状態を保ち、

水産資源だけでなく、景観、憩いの場、食文化、観光など

多くの恵みを楽しむ「豊かな海」です。

かがわ「里海」づくりビジョンでは、

この「里海」の概念にもとづき、

海からの視点で、わたしたちの暮らしや社会を見つめ直し、

様々な団体や個人が連携・協働しながら、

香川らしい里海づくりに取り組むための「共有理念」を明らかにします。

すなわち、目指すべき里海の姿を明確化し、

わたしたち県民一人ひとりが、

生活者として、また、社会の一員として、できることを見つけ、

実践するための方向性を示すものです。

瀬戸内海の環境悪化は、 わずか50年前から。 健全化には まだまだ時間がかかります。

わたしたちの祖先は、古くから瀬戸内海を愛し、
その恵みを享受しながら調和を保って暮らしてきました。
そのバランスが崩れたのはわずか50年前から。
瀬戸内法による水質総量規制など様々な施策が講じられてきた結果、
水質については一定の改善がみられるものの、
海水の栄養塩の循環バランスが崩れることによる赤潮の発生やノリの色落ち、
海ごみ、人と海の関わりの希薄化など、
わたしたちの海は、依然として多くの課題を抱えています。

奈良時代

万葉集に「玉藻よし 讃岐の国は…」
と詠まれているように、香川の海は、
海底に揺らぐ海藻が見えるほど透明
度の高い海だった。

江戸時代

津田の松原(さぬき市)、松ヶ浦
(坂出市)、有明浜(観音寺市)が
白砂青松の名所として知られる。



江戸時代に紹介された津田の松原

幕末～昭和初期

- 幕末～明治
シーボルトやリヒトホーフエンらが世界で紹介する
中で、「瀬戸内海」という呼び方が生まれる。
- 明治44年
香川県出身の小西和が瀬戸内海を総合的に論じた
「瀬戸内海論」を刊行。
- 昭和9年
瀬戸内海が国立公園第1号に指定

昭和40年代(高度経済成長期)

公害問題で「瀕死の海」と呼ばれる
ほど海が環境が悪化、赤潮発生に
よる甚大な漁業被害も発生した。

昭和48年
瀬戸内海環境保全臨時措置法制定
昭和53年、特別措置法として恒久
法化(瀬戸内法)。



赤潮の発生



赤潮による養殖ハマチの被害

瀬戸内海で
公害が発生!

現在（香川の海の5つの重要課題）

① 改善傾向が見られない「有機汚濁」

富栄養化の指標である「全窒素・全りん」は、近年、環境基準を100%達成しているが、有機汚濁の指標である「COD」は達成率が低い。

【香川県環境基準達成率(H23)】

・COD(有機汚濁の指標) **43%**
(瀬戸内海全体78%、全国78%)

・全窒素・全りん(富栄養化の指標) **100%**
(瀬戸内海全体93%、全国85%)

② 「栄養塩」の循環バランスの崩れ

富栄養化が改善され、赤潮の発生規模は縮小しているものの、栄養塩(窒素、りん等)の循環バランスの崩れにより、海水中の栄養塩が少ない場合に発生する「ノリの色落ち」現象が見られる。

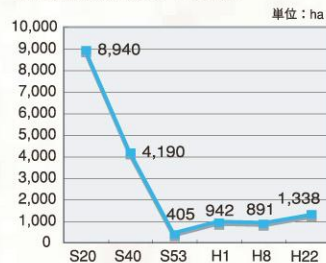


正常なノリ(左)と色落ちしたノリ(右)

③ 増加傾向にあるが、依然として少ない「藻場」

水質浄化や稚魚の生育場として重要な藻場は、沿岸域の埋立てや環境悪化などにより、多くが失われた。近年、増加傾向にあるが、依然として少ない状況である。

【藻場面積の推移(アマモ場)】



アマモ

④ 対応が急がれる「海ごみ」問題

瀬戸内海の海底には **13,000 t 以上のごみ**があると言われており (H18 国推計)、その多くは**生活ごみ**。香川県内の海岸には年間 **754 t**のごみが漂着・散乱している (H15 県推計)。

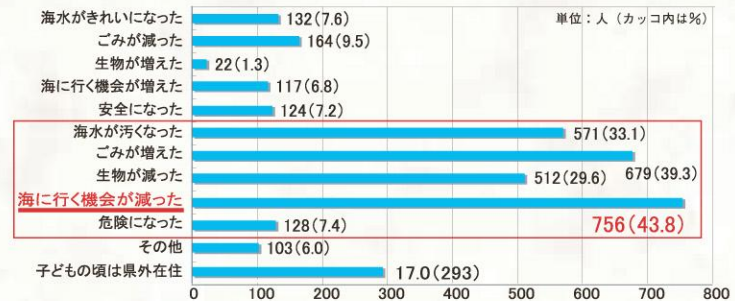


海底に堆積した生活ごみ

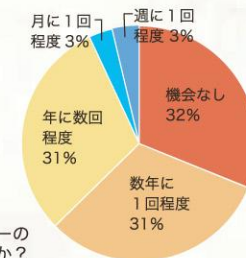
⑤ 「人と海の関わり」の希薄化

【県民アンケートより(H25)】

Q1. あなたが子どもの頃と比べて、香川の海はどうなったと感じていますか？



県民アンケートの結果、子どもの頃と比べて海に行く機会が減ったと答えた人が最も多く、すべての世代で同様の傾向が見られた。事実、月に1回以上海や海辺へ行く人はわずか6%。機会なしと答えた人が3割で、人と海との関わりが希薄化していることがうかがわれる。



Q2. あなたは海や海辺でのふれあいやレジャーの機会をどのくらい持っていますか？

4. 目指すべき香川の「里海」づくりの姿

「里海」を活かした新しい価値創造

～SATOUMI を香川から世界へ～

目指すべき 香川の「里海」の姿

人と自然が共生する持続可能な豊かな海

「保全」と「活用」の調整

交流と賑わいのある海

- ・ 地域資源の活用
- ・ 海との関わりによる交流の促進
- ・ 海に関わる伝統文化の継承



ジョギングやカヤックなど身近に親しめる海



島でアート

伝統的な文化が息づく海

美しい海

- ・ ごみのない海・海辺
- ・ 良好な水質・底質
- ・ 自然景観と文化的景観の調和



世界に誇る多島美と、自然と調和した瀬戸大橋

夕日がきれいな海

透明なごみのない海

生物が 多様な海

- ・ 生物多様性の保全
- ・ 生物生産性の維持
- ・ 生物の生息空間の確保



スナメリや海ホタルに会える海

魚が豊富、潮干狩りもできる海

「全県域」で、「県民みんな」で、山・川・里(まち)・海を「つなげる」



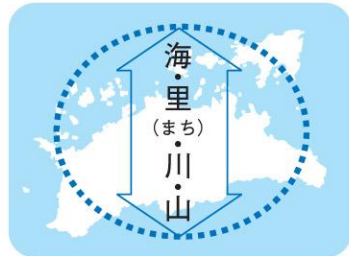
目指すのは、人と自然が共生する持続可能な豊かな海

香川県では、山・川・里(まち)・海を1つのエリアと捉え、全県域で、県民みんなで、「美しい海」「生物が多様な海」「交流と賑わいのある海」を実現します。この3つで構成される「人と自然が共生する持続可能な豊かな海」づくりを通して、自然共生型の新しい社会とライフスタイルを具現化し、香川から瀬戸内海全域へ、そして国内外へ発信します。

全県域で、県民みんながつなぐ山・川・里(まち)・海。

1. 全県域で

香川の地の利を生かして、山・川・里(まち)・海を含む、県内すべての地域を一つの大きなエリアと捉え、連携しながら「里海」づくりに取り組みます。



県内全域が瀬戸内海の流域である



陸域面積に対する海岸線の長さが瀬戸内海で1位(長崎、沖縄に次いで全国3位)

県内どこでも人の暮らしと海が近い



有人島が多く、海との一連の生活空間がある



香川県の有人島数は24島(全国5位)

県民の25人に1人は島暮らし(H22)

2. 県民みんな

「里海」を県民みんなの「共有財産」として捉え、県民一人ひとりが「豊かな海」の恵みを楽しむ機会を増やすとともに、「里海」に暮らす一員としての自覚と責任をもって行動します。



わたしたちの身近な自然は、昔から農林水産業の営みなどを通じて、一定の水準を保ってきた。しかし、社会情勢や環境の変化などにより、これからは社会全体でその役割を担っていく必要がある。

3. つなげる

「人」と「モノ」の2つの視点から、「里海」づくりを通して、海との関係を再構築します。



モノのつながり

山や田畑、工場や家庭からの排水に含まれる栄養塩★や有機物は、川を
通って海へ流れ出し、食物連鎖によって再びわたしたちに戻ってくる。
こうしたモノのつながり(物質循環)を考慮し、健全化を図る。

★栄養塩とは…植物が育つための栄養分として必要な窒素やりんなどの物質のこと。

人のつながり

山・川・里(まち)・海、それぞれの地域での取り組みを、互いに連携させるとともに、エリア全体で総合的に評価する。

5. 取り組みの方向性／②取り組みを推進するための6つのポイント

持続可能な取り組みを支える基盤整備を重点的に。

①推進体制の構築

かがわ「里海」づくり協議会を中心に、多様な団体や個人に働きかけ、活動への参加を促すとともに、個々の取り組みをつなげて、包括的に調整・評価しながら、香川の里海づくりを推進する体制を構築する。

②理念の共有・取り組みへの反映

様々な事業主体が連携・協働しながら、香川らしい「里海」づくりに取り組むための「共有理念」となるビジョンを策定し、広くPRする。ビジョンは、瀬戸内海的环境保全に関する中長期にわたる総合的な計画である「瀬戸内海的环境の保全に関する香川県計画」に反映するとともに、各主体における計画や取り組みに反映させながら推進する。

③意識の醸成

様々な媒体や場を活用した情報発信や体験機会の提供により、県民の「里海」への関心度を高め、里海意識の醸成を図る。特に未来の里海づくりを担う子どもたちを中心に、海や海辺での原体験を増やす活動を充実させる。

④人材育成

- 「里海」づくりを牽引する人材を育成する。その際、海に関する認識は、世代や海との接触頻度などによって大きく異なるため、アンケート等をもとに仮想モデルを想定、対象者に応じた育成プログラムを提供する。

例／環境教育が定着した10～20代へは、現場での体験プログラムを充実させたリーダー育成、20～30代の働き世代へはソーシャルメディアを活用した情報発信への協力を呼びかけるなど。

- 瀬戸内海の文化的・社会的資源である「島」を、これからも持続可能な形で守り伝えていけるよう、島の暮らしや文化の継承者づくりに留意する。

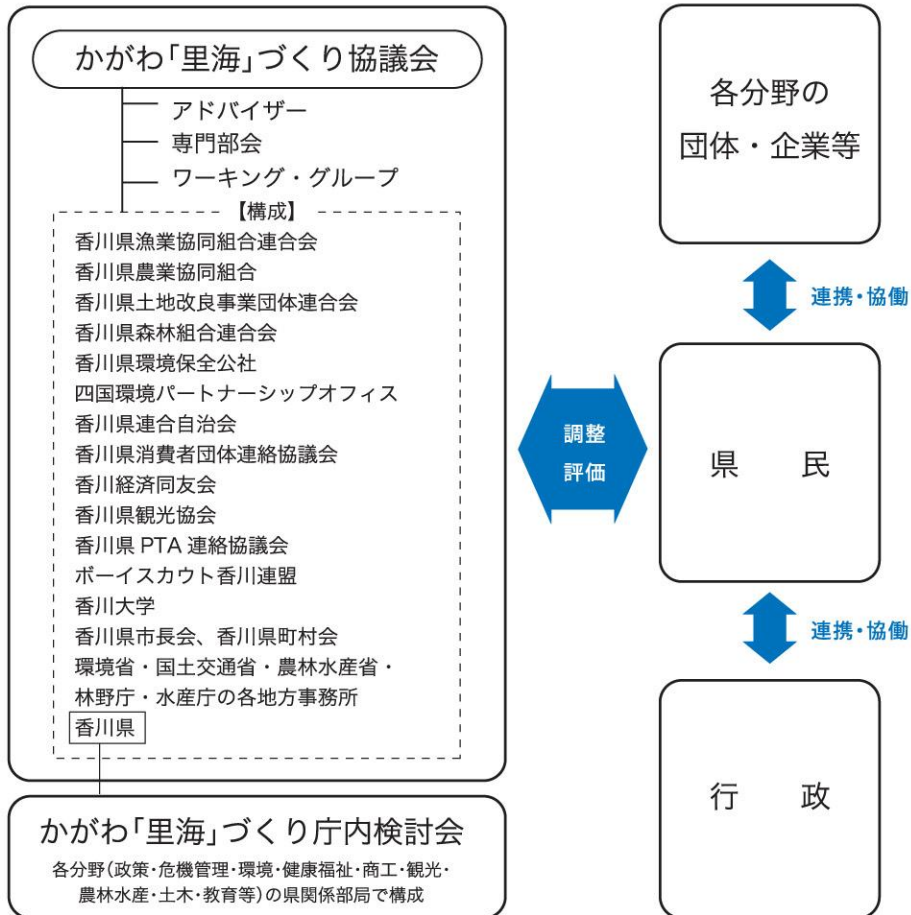
⑤ネットワーク化

地域や分野といった既存の枠を越えて、多様な人たちが「里海づくり」をキーワードに交流・連携・協働できるネットワークを構築する。

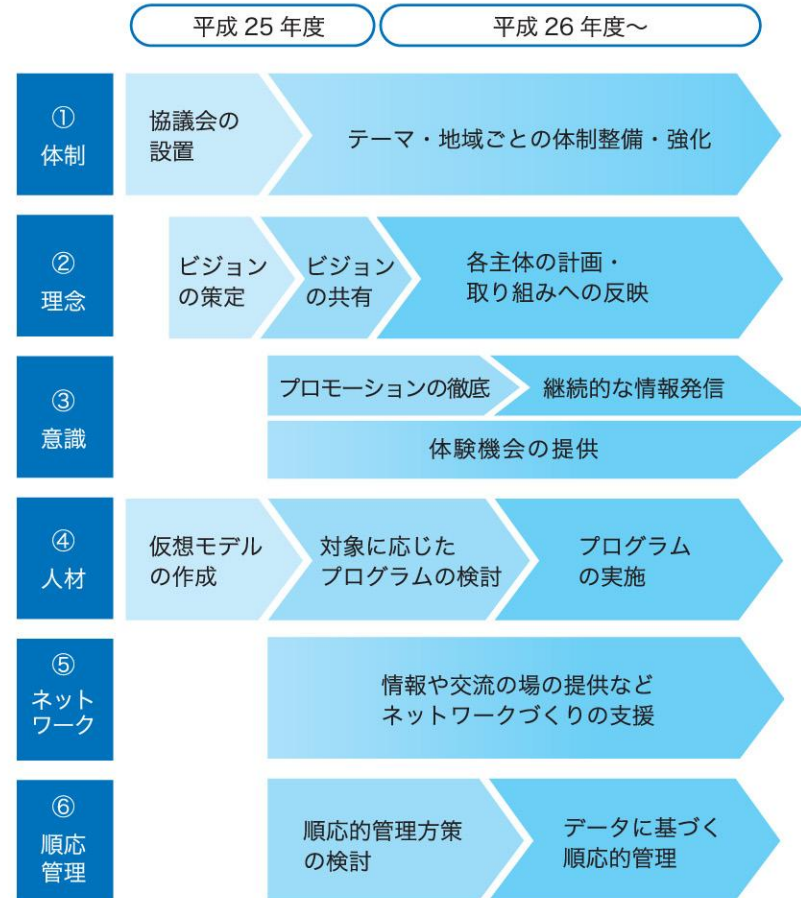
⑥データに基づく順応的管理

データに基づく継続的な検証と評価によって、必要な見直しを行いながら取り組みを進める。その際、容易に取り組めるモニタリング手法の導入や、調査結果および評価内容の公開など、広く県民が参加できるしくみをつくる。

【推進体制】



【6つのポイントの取り組みスキーム】



香川県では、全国初となる海域・陸域一体となった海ごみ対策推進事業をはじめ、

里山再生・竹林資源活用推進事業、生活排水対策重点事業など、すでに里海づくりに向けた取り組みが始まっています。

今後は本ビジョンをもとに、山・川・里(まち)・海をつなげる香川ならではの里海づくりを進めていきます。

里海づくりには、県民一人ひとりの参加が欠かせません。「里海」の一員として、まずは身近な取り組みから始めてみませんか。

かがわ「里海」づくりビジョン

発行 2013年9月

発行元 香川県

問合せ先 環境森林部 環境管理課

水環境・里海グループ

〒760-8570 香川県高松市番町四丁目 1-10

Tel 087-832-3218 Fax 087-806-0228